

## 文学と言語学の接点

——ジャック・ロンドンがみせてくれる新たな可能性——

北村 康晴

### 0. はじめに

人間が社会生活を営む上でその基底となっているものが「言葉」である。その言葉の働きや仕組みを学問的に解明しようとするのが「言語学」であり、一方で、言葉の運用が芸術域にまで昇華したものが「文学」である。「言葉」を共通項とするこれら両者に学問的接点があることは容易に想像される。実際にこれまで、言語研究に携わる者が、その分析対象を文学作品にまで広げた研究はあったし、同様に文学研究に携わる者が、言語学的な観点で作品研究を行うこともあったわけである。「言葉によって心を動かされるという不思議」(Dylan Thomas: 作家・詩人)や「すぐれた文学作品が、言語使用における最高の事例である」(Geoffrey Leech: 言語学者)といった言葉が示すように、文学と言語学は密接に関係しあっており、その両サイドからアプローチがあることはまことに理にかなったことだろう。

さて、従来この両者の隣接領域では「文体論」(stylistics)が幅を利かせてきた(詳しくは2節参照)。しかし、文学作品という、質・量ともにとてつもなく大きな素材に対して言語学的分析を加える時、従来の「文体論」という範疇でどこまでカバーできるのだろうか。

本稿では、文学作品の中でも、読者がその作品から作家のメッセージを読み取れるようなタイプのものに着目する。そして、そのメッセージ伝達が、いかなる技法を用いて実現されているのか、作品構成の面から考えていく。またその種の分析が、従来の文体論の枠組みで説明可能なのか、あるいは新しい枠組みの設定が必要なのか、といったことについても考えていく。

具体的には第1節で、「言語学」と一言にいつてもその領域や広がり極めて広いので) どういった分野の言語学が文学と隣接していくのか考える。第2節では、「文体論」と呼ばれてきた分野を振り返り、同時に「文章論」、「対照レトリック論」といった関連領域についても概観する。第3節では、実際に文学作品の構成を分析してみる。作家は、日本でも近年再評価され、翻訳書や解説書の出版が相次いでいるアメリカの作家ジャック・ロンドンとした。第4節では以上を踏まえて、文学と言語学を独自の視点で融合させた試案を提示すると共に、今後どのような切り口で、文学と言語学の接点領域を切り開いていけるか、その可能性を考えてみる。

なお筆者自身の専門分野との関係から、本稿では言語学サイドからのアプローチとなるが、できるだけ言語学術語は控え、どの分野の方にも読んでいただけるよう配慮していくつもりである。

## 1. 言語学について

### 1.1. 言語学とその広がり

言葉はその機能・役割の多様さゆえ、言語研究においても、その目的や対象、方法は様々である。その広がりには広範囲に及び、またその境界を明確に規定することも容易ではない。こうした言語学の広がりをエイチソン（1998:7, 9）は次の図1のように示している。

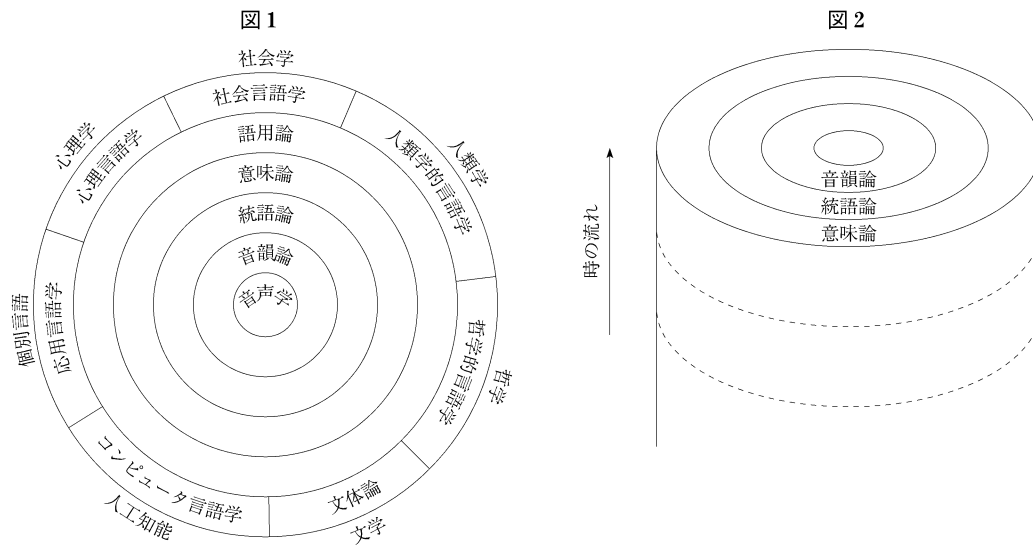


図2

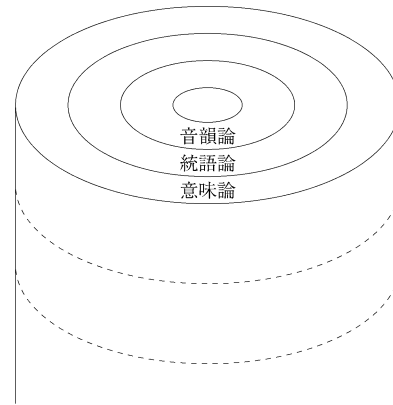


図1に「時の流れによる変化」（歴史言語学）を加えたものが図2である。その他にこの図で示せなかったものとして、エイチソン自身が言語類型学を挙げている。言語の広がりをイメージとして把握するにはよくできた図だと思われる（ただ筆者は、これが言語学の全体像だとは考えていない。例えば、コーパス言語や認知言語的なアプローチをさらに交差させたものが必要かも知れない。特にコーパスは近年、文体論にまで応用されている）。

### 1.2. “文”を超えた研究—談話分析

言語分析でもう一つ考えておきたいことは、分析対象を、語句や文など“単一文内”とするか、それ以上の単位、つまり“文脈”にまで広げるかである。前者、すなわち“文”を最大の単位とする研究は、過去半世紀以上にわたり盛んに行われ、多くの成果が得られてきた。前節のエイチソンの図で言えば、目安としては中心から4番目の円辺りまでである<sup>1)</sup>。

一方、その円の外側となる語用論の分野は、通常“文”を超えた分析となる。特に“文脈”や“話のまとまり”を対象とする研究は談話分析（discourse analysis）と呼ばれるが、まだ“文”の研究ほどには成果が蓄積されていない。その大きな原因は、文よりも大きな単位を対象とするために、相対的に分析や判断が難しいからであろう。児玉（2008）などは、この分野における今後のさらなる研究の必要性を強く主張する。同書 p. 139 では「全体と部分」という観点から、そ

の構成要素を、音素→形態素→語→句→文→(段落)→談話、というように分けている。「段落」の部分原書ではカッコで括られているが、筆者はこれに修正を加え、「段落や話のひとまとまり」としておきたい。本稿では、作家のメッセージを作品全体の構成との関係で分析していくことになるので、「談話」レベルを対象とすることになる（作品全体が対象なので“巨大な一つの談話”とも“小さな談話の集合体”とも言えるだろう）。

### 1.3. 文学作品の言語学的分析

次の2つの英文は意味内容においては大きな違いはないが、発話者の伝えたいニュアンスが異なる。

- (1) a. We can open this door easily.  
b. This door opens easily.

両文はいずれも、ある特定のドアに関して、開けることが容易であることを述べているが、(1a)は動作主（＝動詞の指し示す動作を司るもの。この場合 we）の存在が表に出てくる一方、(1b)では（開けやすいという）ドアの特性が前景化されてくる。動作主とドアの特性が図と地の関係を作っており、構文によってその関係が逆転するわけである（詳しくは北村（2005）を参照）。

例えば文学作品において、作家がどういった構文を選択したかということ进行分析することによって、作家の意図やより深い描写状況を読み取れる場合もあり得るわけだ。ただし、たとえ分析対象が“構文”であったとしても、文学作品の中においては、“文”ではなく“文脈”の分析が行われていると考えるべきだろう。なぜなら、話の流れや前後の文脈があってこそ、それを背景にその構文が選択された理由を言語学的に探っていくことになるからである。これは単語レベルでも同じことである。（類似した意味の別の単語も考えられる場合に）なぜ作家がこの単語を選択したかという分析や、なぜ単数形でもいいのに複数形にしているのかといった分析も、すべて話の流れなり文脈に依存するわけである。文に対する修辭的な技法もまた然りである。

ところで、言語学サイドから文学作品を分析する場合、以前はよく詩などの韻文が分析対象として好んで使われてきた。これは散文の分析がいかに難しいかということの裏返しであるとも言える。また、前節で述べたように、言語学における最大の関心事が、長らく“文”にあったことも、散文の言語的分析が遅れた原因であろう。そうした状況の中、散文に初めて真正面から取り組んだのが、Leech & Short（1981）だと思われる。ここでの分析手法は、主に作品の全体から計量したデータによって、数値的に文体の特長を見ようとするものである（詳細は2.1.を参照）。

本稿では構文分析も行わないし、計量データも取り扱わない。あくまでも作家のメッセージがどのように伝えられているかを作品の全体構造との関係から分析していく。

## 2. 言語学と文学の隣接領域

本節では、第3節で実際に文学作品の分析をするのに先立ち、言語学と文学の隣接域あたりに

存在すると考えられる学問領域を一通り概観しておく。

### 2.1. 文体論 (stylistics)

文体論が学問領域として、文学と言語学の狭間にあることは間違いないだろう。例えば文体論学者の資質について、『文体論入門』（日本文体論協会編）では、次のような記載がみられる。

“すなわち文体学者はなにはともあれ文体という微妙なものを嗅ぎとることの出来る敏感な文学者でなければならず、他面においてその嗅ぎとったものを、こんどは冷やかな分析にかけることを知る科学者でなければならない。”（小林（1966:5））

“従って文体論研究者としての資格として第一にあげねばならないのは人一倍、文体印象を強く感じ得ること、常に文体分析のメスを鋭利にしておくことであろう、次にはこの文体印象を手がかりとして作家の個性にまで遡るために可及的に科学的な方法を以てする熱意であろう。”（林（1966:105））

それでは文体論は具体的にどういったことを研究対象とするのだろうか。実は現在に至っても、扱う領域に関して明確な定義が見られず、また理論的にも体系化されていない。そもそも「文体」の定義も研究者により様々である。文体論は古代ローマ・ギリシャ時代の修辞学をその源として、各地域で独自の発展を遂げていったのがその原因の一つであろう（よって豊田（1981）も言うように、日本語の文体論と英語の文体論はイコールの関係にはならない）。

こうした背景があるので本稿では文体論の枠組みについては深く立ち入らないが、斉藤（2000）は文体論成立の歴史的背景や地域による違いなどを詳しく説明しているので参考にはなると思われる。同書は「文体」を「装飾」(ornamentation)、「個人の言葉の癖」(idiolect)、「選択」(choice)、「逸脱」(deviation)、「一貫性」(coherence)、「共時義」(connotation)などの言葉に置き換えて説明している。また前節でふれた Leech & Short（1981）では作品分析を行うため、①語彙に関するデータ、②文法に関するデータ、③文彩、④結束性（＝文と文の結合）と文脈、という4つの項目を上げている。両者を通して文体論の輪郭がぼんやりと見えてくるが、どうやら本稿の目指すもの、すなわち作家のメッセージが作品の全体構造を通してどのように伝えられていくか、という検証には文体論的なアプローチでは難しそうである（ちなみに Leech & Short（1981）から20年後に出版された同書の邦訳版に追加収録された付章において、新たにストーリーやプロットについて少しだけ言及されている）。

### 2.2. 文章論

日本語学の分野で「文章論」という学問領域がある。最初にこの言葉を使用したのは時枝（1950）だと思われ、その後もこの言葉は使われていくが（例えば、林（1973）、市川（1978）、長田（1984）、永野（1986）、南（1995）、メイナード（2004）など）、「文体論」同様、領域的に確立されたものではなく、研究者により内容は大きく異なる。ちなみに大学の授業で「文章論」という科目が開講されている場合、そこで当てられている英語表記が“Japanese Syntax”, “Japanese Com-

position”とされていたり、英語を対象とした談話分析を「文章論」としている場合さえある。

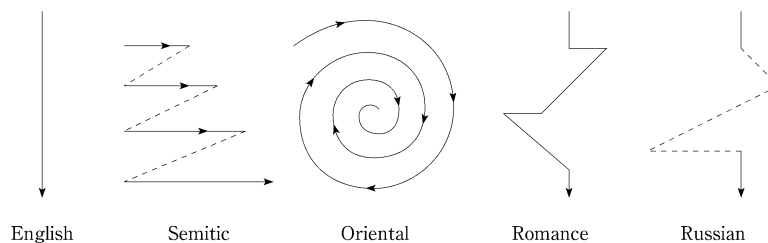
文章論の一つの領域として、特に注目しておきたいのは「文章の統括」という概念で、寺村他編（1990）や佐久間（1999）などにおいて扱われている。これは、中心となる情報が談話のどの場所で提示されているかということをテーマにした研究である。つまり本稿が目指す枠組み（メッセージが作品のどの場所に置かれているか）にこの「文章の統括」という概念を応用できる可能性があるわけである。しかし「文章論」は、「日本語学」における一分野として日本（語）的表現の特性を明らかにすることが研究テーマであるので、それが英語、しかも文学作品にどれだけ適用できるか、慎重に考察しなければいけない。例えば欧米人の書く文章は、一般的に言って結論を先に出してから説明していくが、日本人のそれは、最後になるまで結論がわからない場合が多く、そこに普遍性が少ないからである。

### 2.3. 対照レトリック論（Contrastive Rhetoric）

レトリック（修辞）の歴史は古代ギリシャにまで遡る。当時の教養科目である「文法」が“言葉を正しく話したり書いたりする技術”であるのに対して、「レトリック」は“言葉を巧みに話したり書いたりする技術”とされていた。現代では広い意味で使われており、相手を説得するための「説得術」として広義で解釈されることも多く、スピーチコンテストなどの審査項目の一つにもなっている。本稿の目指す枠組みに引き寄せて考えてみると、作家が（自身のメッセージを効果的に伝達するために）作品を構成する上で凝らす技法、といったものもレトリックになるわけである。

ところでこうしたレトリックは、ある文化圏では高い効果を発揮しているも、別の文化圏においては必ずしもそうであるとは限らない。こうした問題を研究対象とするのが「対照レトリック論」である。最初にこの分野を切り開いたのは R. B. Kaplan だと思われる。Kaplan（1966）では留学生に作文指導をする中で、文化圏により文章構成が異なることに気づき、それらをまとめている。次の図3（Kaplan（1966:15））は5つの文化圏の話し手の議論の進め方を比較対照したものであるが、英語圏の話し手は、問題提起から結論まで議論をまっすぐ進めるのに対して、ユダヤ系は同じことを表現を変えながら話を進め、東洋系は遠回りをしながら話の核心に近づいていくことがわかる。

図3



日本語と英語の対照レトリックに関しては、Hinds（1983）が注目に値する。そこでは朝日新聞の「天声人語」英訳版を利用し、日本語で広く用いられる「起承転結」について調査を行って

いる。こうしたアプローチが外国文学に直接関係するとは思えないが、「全体構造」を取り扱うという意味では応用できる可能性もある。実際の文学作品の構造分析をした上で、前節の「文章論」と合わせて、第4節で再び考察を加えたい。

### 3. 文学作品の言語学的分析

#### 3.1. 分析について

##### 3.1.1. ジャック・ロンドンを選んだ理由

本稿では、考察対象の作品をアメリカの自然主義作家ジャック・ロンドン（1876-1916）のものとした。その理由は、①短編作品に特に優れた才能を発揮しており、言語分析をする上でも短編作品のほうが容易であること、②ロンドンの作品にはメッセージの込められたものが多く、本稿の趣旨に沿うこと、③作品の構成が巧みで、かつ作品ごとに様々な構成の違いがみられる、以上の3点である。今回は“極北もの”、“クロンダイクもの”などと呼ばれる短編作品群の中から4篇を取り上げる。1893年は有名な大恐慌があり、当時人々は夢も希望も失っていた。そのような時に、クロンダイク地方で金鉱脈が発見されたことにより沸き起こったゴールドラッシュ（1987年）は、およそ25万人の人々を現地向かわせた。ロンドン自身も同年、21歳の時に加わっている。この時に現地で人々から集めた実話や様々な逸話、そして彼自身の体験などを素材として書き上げたのが今回取り上げる作品群である。

##### 3.1.2. メッセージについて

作品を通してみられるロンドンのメッセージには二種類ある。一つはそれが作品中に言葉として明示的に出されているもの、もう一つはそうでない暗示的なものである。また、文明、自然や動物、社会や政治、民族など時代を問わず人類に共通する普遍的な内容が多いため、メッセージが明示的に表現されている場合であっても、さらに第2、第3の暗示的なメッセージが存在している可能性もある。例えば「マーカス・オブライエンの行方」では、後で述べるように、筆者は単純明快に「アルコール飲酒への警鐘」がロンドンからのメッセージだと解釈しているが、日本ジャック・ロンドン協会編（2005）のエッセイ集（『北極もの短篇群特集』）に目を向けてみると、4名がこの作品を取り上げておられ、そのメッセージ解釈も千差万別であることに驚かされる。

そもそも文学作品において作家のメッセージを読み取るのは容易なことではない。例えば、演説や新聞コラムなどでは、それを通して作者が自身の主張なりメッセージを伝えるのが目的であるから、すべての読者・聴衆に確実に伝わるような配慮がなされている。読者・聴衆によって解釈の違いが生じるようでは、本来の目的は達成できないのである。一方、文学作品の場合は、メッセージの存在するようなタイプの作品であっても、作家は読者を旅に連れ出し、様々な情景を見せていき、そうした過程を通して読者の心にメッセージを投影していく。よって、読者によりその感じ方や解釈に揺れが生じる場合も十分ありえるし、作家の考えが及ばぬところにまで、読者の想像力が及ぶことさえあるだろう。このあたりは“客観的な分析”を最重要とする言語学研究サイドから見ると、大きな壁となり得る。中村（1993:33）が文学サイドから述べている次の

言葉などは、まさにその裏返しと言えよう。

“文章の一方の専門家であるはずの言語学者は、たいへん淋しいことだが、客観性、科学性がないということをおそらくは楯にとって、名文と駄文を区別する営みに手を染めようとしない。良心的といわれる慎重な学者ほどそうだ”

本稿ではこの壁にこれから直面していくわけであるが、少なくとも議論を明瞭に進めていくために、まず筆者が作品から解釈したメッセージをあらかじめ提示し、同時にそのように解釈した根拠を示す。その上で、作品の全体構成を分析し、そのメッセージが作品のどの部分に配置され、どのように読者に伝わっていくか、などを考察していく。

### 3.1.3. 構成分析について

以下、4作品を考察していくが、作品の全体構成を分析するに際して、“話の大きな流れ（まとまり）”をパーツ化している。そして各々に①、②、③という番号を割り振る（つまり①が話の始まりとなり、一番大きな数字が話の最後である）。このパーツの一つあたりの大きさをどれほどにするかは難しい問題であるが、あまり細分化しても全体との関係がつかみにくくなるので、比較的大きく区切っている（3～5つ程度）。

さらに量的な観点からも考察するため、各パーツに費やされている行数を参考にして、作品全体と各パーツの関係が直感的にわかるよう横棒グラフを作成した。その中で黒く塗りつぶした部分がメッセージの置かれている場所である。

## 3.2. 作品研究

### 3.2.1. 「マーカス・オブライエンの行方」—“The Passing of Marcus O'Brien”（1908） 〈あらすじ〉

舞台はユーコン川沿いの小さな村、レッド・カウ、時代はゴールド・ラッシュで人々が殺到するその10年前という設定である。この村では法律は住民お手製のものしかなく、犯罪者を監禁する牢屋もない。金の採掘に忙しく、そうしたものを作る時間がないのだ。罪を犯したものは、主人公のマーカス・オブライエン判事に裁かれ、ユーコン川から小舟で流される。うまく生き延びれば約20日で3200km先のベーリング海まで到達出来る。舟に積まれる食料は罪の重さに応じて決まり、軽い罪なら2週間分、重大な罪ならゼロ（つまり死刑に相当）である。ある日、オブライエンが金の鉱脈を発見した。その権利を買い取りたいというカーリー・ジムとの商談が始まる。この2人の間を取り持ったのが「アルコール」である。ジムは交渉を有利に進めるためにウイスキーを次々と振舞うのである。オブライエンの仲間2人も加わり、権利を売る、売らない、のシーソーゲームがリアルに展開されるが、結局、ジムの交渉は失敗に終わる。酒に酔いつぶれたオブライエンは仲間の2人に両脇を支えられ帰り道を行く。その時、仲間の一人が悪ふざけを思いついた。意識のないオブライエンを小舟に乗せ、ユーコン川に流したのである。翌日、カンカンになって戻って来るはずのオブライエンを村人たちは楽しみに待った。ところがオブライエンは戻ってこない。彼は意識が戻った時、自分がなぜ舟の上にいるのかわからず、その後、あれこれ

推論した結果、酔った勢いで人を殺してしまい、その結果舟に乘せられたのだ、という結論に達していたのだ。途中、鳥の卵などを食べながら命をつなぎ、25日後にベーリング海までたどり着いた。そして運良く密輸巡視艇に救出されるのであるが、その年の冬、彼はサンフランシスコで禁酒論者として大成功をおさめることになる。禁酒運動に身をささげ、自身の経験をもとに酒の恐ろしさを人々に語り、尊敬を集めるようになるのである。

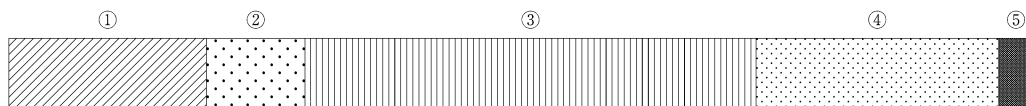
#### <メッセージ>

アルコール飲酒への警鐘

《根拠》：次の3つをあげたい。

①この作品の一つの見せ場であるジムとオブライエンの商談で、オブライエンやその仲間の考えをコロコロと変えていくという重要な役割をウイスキーが果たしている（二転三転という言葉があるが、ここでの気持の変化は10回近くに達する）。②話の締めくくりで、主人公オブライエンについて、「禁酒論者として大成功」、「禁酒運動に身をささげ人々の尊敬を集めていった」とし、作者が明らかに飲酒行為をマイナスのものとみなしている。③時代背景的にも、当時のアメリカでは禁酒運動が盛んであった（その後、実際に禁酒法が施行されることになる）。

#### <作品構成>



①レッド・カウでの裁判の様子が描写される（p. 152 l. 1（始）— p. 156 l. 10 [74行]）

②レッド・カウの住民やその法の説明（p. 152 l. 11— p. 158 l. 15 [37行]）

③主人公、金鉱脈を発見。カーリー・ジムとの商談（p. 158 l. 16— p. 169 l. 6 [167行]）

④主人公、仲間にあらずらされ舟で川に流される（p. 169 l. 7— p. 175 l. 4 [93行]）

⑤主人公についてのその後の話。禁酒論者として大成功。（p. 175 l. 5— p. 175 l. 15（終）[11行]）

#### <考察>

ロンドンのメッセージを直接感じ取れるのは最後の⑤の部分であるが、アルコールは③から登場し、④においても主人公は飲酒したことを盛んに後悔するなど、⑤に向かっての下地が形成されている構成である。

### 3.2.2. 「極北の地にて」— “In a Far Country”（1899）

#### <あらすじ>

この作品の主人公は、現代文明の申し子と言える事務員のカーター・ウェザビーと文学修士のパーシー・カスファーストである。2人ともお金に困っているわけではないが、日常の生活に飽き足らず、ゴールドラッシュの波に乗り、計画性もないまま極北へと向かう。彼らは金鉱脈を求めて旅する一行に加わったが、その一行はエドモントンを經由する最も過酷なルートを選択して



いた。怠け者の彼らは一行との集団生活に馴染めず、またその旅の過酷さから案の定、途中で脱落する。春に出発し、すでに冬が迫ってきていた。2人はキャビン（小屋）で越冬することになり、そこで2人だけの生活が始まる。2人の感性や性格は全く対照的で、怠け者という点だけが共通していた。よってキャビンでは争いごとが絶えず、やがて口も利かなくなってしまう。そこへ輪をかけて2人に壊血病が襲う。さらに別の問題もあった。それは恐ろしいまでの静寂である。極北の冬は夜しかない。そしてあまりにも厳しい寒さのため、生き物の音さえ聞こえてこないのである。この静寂が2人の精神状態を蝕んでいく。ウェザビーは亡霊に取りつかれ、カスファーストは屋根についている風見鶏を病的崇拝の対象とする。以後も2人の醜い関係が生々しく描かれるが、一度だけ2人の気持ちが一つになった時があった。2人は、北に昇った太陽を幻覚として見たのだ。これで長い冬、そしてその恐ろしい静寂から逃れ、帰路につけると2人は希望を持ったのである。しかし、その直後、間違っって相手の砂糖を食べてしまったことが引き金となって、お互いに殺しあうこととなる。

### <メッセージ>

極北の地で、どんなことにもきちんとした態度でのぞむ気持ちを維持する（とりわけ仲間への接し方）ことの大変さ。

《根拠》上記メッセージは、ロンドンがこの作品の最初の部分（p.9）で明示しているものをそのまま採用した。ただし本作は単にそれだけに終わらず、現代文明と太古から続く厳しい自然の対比、環境への適応力、集団生活、計画性、目的意識、など多くの啓蒙的なキーワードを拾うことが出来るので、第2、第3の暗示的メッセージが存在することも否定はできない。しかしながら、上記の明示部分がこの話の見せ場であるキャビンでの2人の生活と直接リンクしていることもあり、客観的に解釈する上でも、この部分をメッセージとした。

また最後から2つ目の段落（p.37 1.1—p.37 1.4）で話の色合いが少し変わっているように感じられる（2人のどちらが正しかったかについて神に裁きを求めている）。これが作品全体の中でどういう位置づけとなっているのか、またメッセージと何らかの対応関係があるのか、といったことを考えてみたが、現時点では結論は出せなかった（もしこの段落に重要な意味があるならば構成の分析結果も変わってくるだろう）。

### <作品構成>



①極北の地に出る時の心構えなど（p.8 1.1（始）—p.9 1.10 [26行]）

②登場人物の紹介。クロンダイクへの旅。脱落（p.9 1.11—p.19 1.4 [154行]）

③2人のキャビンでの生活。殺し合い（p.19 1.5—p.37 1.5（終） [281行]）